

＜書 評＞

上田 敏 監修（東京大学）

森 亨・他 執筆（結核予防会研究所付属病院）

カード式

在宅脳卒中のリハビリテーション

谷岡 淳（自治医科大学）

本書を一読して感じることは、過去10数年自分自身が行ってきた病院外での患者の指導について、自信を与えてくれる面と、在宅脳卒中患者のリハビリテーションのあり方を再考させられる面が、交錯することである。

監修の上田先生が述べられているように、地域リハビリテーションの基本技術を基準化するのにはどのようにすべきか、それが基準化されたものが、患者本人や家族にどのように実践の段階にまで浸透させていくか、保健婦を中心と考える地域リハビリテーションの現状は、あまりにも限られた専門職に負担がかかりすぎてはいないだろうか。

ここ数年、保健婦の方々とリハビリテーション研修会を持ち、現場の実情をいろいろ提起していただいているが、保健婦の従来から現在に至

る業務内容の繁雑さを考えると、リハビリテーション技術の習得、実践うんぬんよりも、保健婦業務の整理の方が先決の感は否めない。

しかし、この本では保健婦が中心となり、他の医療従事者の協力、助言を得て、実現困難とも考えられていた地域におけるチームアプローチを見事に実現しているところに重みがある。

第1章の、なぜいま地域リハビリテーションなのか、をみても如何に、執筆者等が地域リハビリテーションの浸透に不断的努力を払われたかが手にとるように理解できる。

患者および家族の指導は、単にリハビリテーション技術の切り売りでは解決できないこと、その実情を踏まえて、かゆい所まで気を配っている点には、敬服する。

第2章の在宅訓練の理解とその方

法では、訓練の目的や目標が明解にされ、患者の障害の理解やリハビリテーション過程で、もっとも阻害因子となる合併症の防止策も丁寧に解説されている。

また、在宅訓練の範囲を明解にし、範囲を越える訓練を戒めている点、読者にとっても大いに参考になると思う。

リハビリテーション、即訓練というとらえ方ではなく、なぜ、どうして、それならば、どこまで、援助ができるか、その担い手が保健婦であれ、医師であれ PT, OT であれ、考えさせられる実務書である。

チームアプローチが不可欠で、情報交換の重要性を説いているのも、多年にわたる実践から言えるものだろうし、それを強調できるのも、この本のユニークさであろう。

ややもすると、知識、技術が先行する医師、PT, OT, ST, 保健婦、その他の医療従事者が、自分達の足元をみて、地域医療のあり方を熟考するために、一読をすすめる本である。

（A 5, 頁192, 図95, カード68枚, 1982, ¥4,000, ㄱ350

カードのみ：箱入り 68枚, 1982, ¥1,900, ㄱ250, 医学書院 刊）